

人生100年時代が到来しつつある今、どんな「人材育成」が求められるか？

講師 石川 善樹 氏 予防医学研究者・医学博士

人生100年時代を生きる今の子どもたち

予防医学という観点はかなり教育とも近いと思います。予防医学では人生は100年時代に突入したと言われており、最近生まれた子どもは平均寿命107歳になるだろうと予測されています。ですから今日は、人生100年時代における「人材育成」をどう考えればいいのかについて問いを投げかけてみたいと思います。

最近の予防医学は「well being」という方向に向かっていきます。私がハーバード大学在学中に徹底的に叩き込まれたことは、「とにかく語源を調べなさい」ということです。アメリカにはいろいろな国から人が集まってきたので、言葉に対するイメージが人

それぞれです。だからとにかく語源を調べてから授業に出席しろと言われました。「well being」の being は「本質」、「well」は「満足」という意味です。つまり、「満足の本質に迫ろう」ということです。

今ここにいらっしゃる皆さんは、おそらく平均寿命90歳の方々ですが、本格的に人生100年時代が到来している今、何が変わるかというと、定年の概念が変わるでしょう。今皆さんが教えているお子さんたちは75歳まで働く時代に生きていくのです。

50歳までは修行期間であり学びの期間

先日サッカーの本田圭佑さんにインタビューさせていただいたのですが、今のサッカー日本代表選手の中では、幼い頃からずっとエリートで活躍していた人はほとんどいないそうです。もちろんサッカーが上手な部類には入っていますが、その中ではずっと落ちこぼれで、それでも小さな一歩をずつと重ねてきた人が最終的に日本代表に選ばれているとのことでした。

しかし、それでもあるところで限界に到達します。これ以上いくらやっても伸びようがないと思われるとき、そ

の限界を乗り越える選手と乗り越えられない選手がいます。その違いは何なのかというと、結論から先に言ってしまうと、他分野からの学びがあるかどうかです。

元陸上競技選手の為末大さんは世界3位が限界だったと言います。どれだけ頑張っても努力しても金メダル、銀メダルをとれる自信が湧かなくなってきたら、そうなるにつれて、目標からの逆算では進歩しやうがなくなるんですね。金メダルをとることがどうしようもなくなったとき、そこで初めて自

分の内側と向かい合い始めました。「走って楽しい」という感覚とは何なのだろう？」という、それ自体哲学的な問いからヒントを得て、他分野から、思わぬところから学び、結果として為末さんをさらに上に押し上げたというわけです。最終的には「ただ走るのが楽しい」という、陸上競技を始めた頃の感覚に戻っていったのです。

これは研究者でもほとんど同じです。例えば私はずっと様々な教育を受けてきましたが、勉強はつと嫌でした。ところがアメリカから日本に帰ってきたと

き、英語の論文がすらすら読める自分に気づき、いつのまにか勉強が好きになっていったんだと初めて思いました。そうなるほどとんどん面白くなってきて、様々な分野から学んでいこうじゃないかと思ひ、中室牧子先生（慶應義塾大学総合政策学部 准教授）とも一緒に研究したりしています。

為末さんにしても私にしても、こうした変化は昔ながらの日本人の感覚でいうと「守破離（しゅはり）」（※参照）ということだと思います。最初は守り、そして破り、やがて離れていくのです。「破る」のはいつ頃なのかといったとき、人生100年時代においては50歳くらいだと思います。

日本人の今のノーベル賞受賞者は、ノーベル賞をとるための研究を始めるのがだいたい40歳です。40歳までは修行期間なんですね。私たちの時代は50歳までが修行期間といわれています。50歳まではとにかく自分の幅を広げ、深めます。これは今現在社会で生きているビジネスパーソンも同じなのではないでしょうか。

アメリカの企業文化を支えているのは、様々な社会経験や人脈をしつかり持っている人たちです。投資家もそのような人がつくった会社に投資します。とにかく今の時代は50歳までは学びの期間だと思います。そういった大きな大局観をもって、

限界だと思われるようなところに行ったり、他分野から学んだりするので。動機は柔軟に変えていくことが重要です。

本番は50歳からだと思えば何にでも挑戦できる

人生100年時代に「より良く生きる」とはどういうことなのでしょう。それを子どもたちに見せてあげるのとはとても大切なことなのだろうと思います。

修行期間が伸びているということ、は、私たちの教育の常識も変えていかなければなりません。人生の本番は50歳からだと思えば、何にでもチャレンジできるし、しやすいくと思います。「考える」とはどういうことなのでしょう。

要です。外的動機にもついたり、内的動機にもついたりしながら修行を積んでいくのです。

しょうか。逆に言うとな人類は、この問いに対してまだ体系化された答えを用意していません。今こそ、まさにこのようなことを考える時代に来ているのだと思います。

どんどん進んでいく都市化——。これも非常に大きな問題ですが、要するに多様な人が増えてくるということ、です。東京という街を歩いていると、本当にいろいろな人が増えたと感じます。私たち自身、日々多様な人々と触れ合っているというのとは、多様な人々と共存するということなのではないかと感じます。ぜひ皆さん、私たちのような異なる分野の人間と付き合っていたらと大変ありがたいと思います。

※「守破離（しゅはり）」日本での茶道、武道、芸術等における師弟関係のあり方の一つ。日本において先の文化が発展、進化してきた創造的な過程のベースとなっている思想でもある。まずは師匠に言われたこと、型を「守る」ことから修行が始まる。その後、その型を自分と照らし合わせて研究することにより、自分に合った、より良いと思われる型をつくることにより既存の型を「破る」。最終的には師匠の型として自分自身が造り出した型の上に立脚して個人は、自分自身と技についてよく理解しているため、型から自由になり、型から「離れ」て自在になることができる。武道等において、新たな流派が生まれるのはこのためである。

